

Title	山崎功著 パルミーロ・トリアッティ：その生涯と業績
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.1 (1966. 1) ,p.106(106)- 107(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19660101-0106
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660101-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

山崎 功著

『パルミーロ・トリアッティ
—その生涯と業績—』

現在、国際共産主義運動はその運動はじま
って以来最大の危機に遭遇しているといわれ
る。中国とソヴェート連邦との論争が、たんに
イデオロギー的な論争の段階にとどまら
ず、両国の国家的利害の対立にまで発展し
つつあることは重大である。世界各国の共産
党はこの論争を契機として、二つに分裂し、大
体において西ヨーロッパの共産党は、アルバ
ニアを除いてはソヴェートを支持し、アジア
諸国の共産党は、中印国境問題以来ソヴェ
ート支持にまわったインド共産党を除けば、大
体において中国の立場に立っている。日本共
産党もその例外ではない。この間にあって基
本的にはソヴェートを支持しながらも、中国
共産党を理解し、論争を通じて共産主義の理
論の発展を深め、その団結を強固なものにし
ようという態度を一貫して保持しつづけたの
は、パルミーロ・トリアッティのひきいるイ
タリア共産党であった。一八六四年八月、ト

リアッティは、中ソ論争にかんする有名な政
治的遺書を残してヤルタにおいて客死したこ
とはよく知られているが、この度、山崎氏に
よって、トリアッティの伝記が完成されたこ
とはまことに意義深いものがある。つぎのよ
うな内容から成っている。

I 最高の思想家・文化人、II 新しい変革の
世界観へ、III 社会党への参加、IV 工場協議会
運動と『オルディネ・ヌオーヴォ』紙、V 工場
占領とイタリア共産党の創立、VI ファシズム
の暴風のなかで、VII 共産主義インターナショ
ナルの旗のもとに、VIII 反ファシズム統一人民
戦線と反戦平和闘争、IX スペイン内戦、X 第
二次世界大戦、XI 統一政府実現と社会主義文
化の問題、XII トリアッティ襲撃事件、XIII 連
第二〇回党大会とスターリン批判、XIV 社会主
義へのイタリアの道、XV 情勢の具体的分析と
新たな多数派、XVI 平和と統一のために。

目次をみれば明らかのように、この著作
は、たんなる指導者の伝記ではなく、あくま
でもイタリア共産主義運動を通じてみた偉大
な個性の歴史であり、逆にトリアッティとい
う指導者を語ることはまたイタリアの社会運
動を語ることにほかならないことを示してい
る。

山崎氏はすでにイタリア社会運動史研究の

湯村武人著

『フランス封建制の 成立と農村構造』

封建制成立の指標は何か。著者の関心の第
一はそこにある。これと関連し最近のフラン
ス学界は城主層の果たした役割を強調した。著
者もまたこの線に沿い、考察を進める。もし
て封建制の成立を、荘園大領主の地方支配の
組織が下僚の城主層に移り、その下で再編さ
れた結果とみた。時期的には十世紀末のこと
で、この過程を通じて支配は極度に狭い範囲を
単位に構築されることになった。城主はかか
る支配単位の頂点に立ち、農村支配の実質的
な担当者として権勢を振うことになった。著
者は城主の経済的実力の向上のなかに権力の
分散が達せられたと説く。従ってそれはまた
領主権力の弱体化の過程でもあるわけだが、
そうしたなかで城主が権力を増し得た事情は
ともかく、問題はその時、農村支配の体系に
封建制として自由な契約を基礎とする関係が
打ち出されなければならない理由にあった。
それより以前の支配の仕組みをめぐって著者
は、奴隷制を強調する立場を批判しながら議
論を進める。重要なことは、私見によれば、

一〇六、(一〇六)

権威であり、まさしくこの人によって、トリ
アッティの伝記が書かれたことは至当である
が、ともかくこの書を読み終って感ずること
は、イタリア人民が、いかにすばらしい指導
者をもっていたかをしみじみと感じさせるこ
とである。アントニオ・グラムシとならんで
共産党創立に参加し、一九二〇年代における
トリーノの工場占領と大ストライキのなか
で、マルクス・レーニン主義を体得し、やがて
ファシズムの嵐のなかで全民主戦線の統一の
ために全力をつくし、二〇年代においてはフ
ァンストと社会民主主義者とを区別せず、社
会ファシストとして同列視し攻撃するという
誤謬をおかしたにしても、やがて三〇年代に
おいては、ファシズムの新しい攻勢にたいし
て、共産主義インターナショナル第七回大会
の方針、すなわち、「労働者階級、勤労者、
あらゆる民主的・進歩的勢力の統一のための
闘争」にそって、労働者階級の統一戦線、そ
れは具体的には一九三四年フランスで実現さ
れたイタリア共産党とイタリア社会党との間
の行動統一協定となって結実した。

豊富な本書の内容について詳細に論ずる余
裕はないが、トリアッティの偉大さは、第二
次世界大戦中と戦後の共産党の政策のなかに
遺憾なく発揮されたものといえよう。とくに

荘園経済で重点を直営地に置くかどうかにあ
った。直営地を重視する場合、支配の本質は
奴隷制といわざるを得ない。しかし逆に、保有
農支配の面からは、前説に組すことはできな
いとするのが妥当であった。従って荘園支配
の本質はにわかに規定し難い。著者はフラン
ス学界の諸成果が領主経済との関連で夫役の
持つ意味を重視していないことから、奴隷制
に傾くわけであるが、荘園経済でそれほど直
営地依存度を絶対視するのいかにがなもの
か。保有農に対し金銭納付を要求する程度が
高まって来た事実を思ふ時、それでもなお直
営地を重視し、奴隷制支配を強調しなければ
ならないのか。

今や支配組織の変化は明白である。この時
期にはまた経済的環境も変貌を続けた。変貌
は農村の繁栄のなかで起った。農業技術の改
善は大きな意味を持つ。こうしたなかで三圃
制輪作方式が本格化していった。著者の関心
の第二は下部におけるかかる発展の解明にあ
る。著者はこれを果すためフランス学界の諸
成果を刻明に追う。記述は有益である。結局
問題はまた、そうした発展に照応した時、支
配の仕組みが自由な契約を基調とする封建制
のそれでないならぬ事情であろう。こ
れについて著者は保有農の経済を把握するこ

戦後、国民的統一のあとで、国民の要望と共
産党の方針に従って、トリアッティは、第二
次バトリオ内閣第一次および第二次ボノミ
内閣、フェルルツォ・パルリ内閣、第一次
デ・ガスペリ内閣に、それぞれ無任所大臣、
副首相、司法大臣をつとめ、この統一政権
は、デ・ガスペリ首相のアメリカの援助受け
いれ、左翼政党との絶縁までつづけられたの
であって、このような点に、われわれは、い
かにも国民が総力をあげて独立と平和を獲
ちとった国の共産党の自信と寛容をみること
ができるのである。社会主義への「イタリア
の道」は、そのような豊かな歴史的体験とき
びしい実践と理論との統一、柔軟な政策によ
ってはじめに構想されうる所以であろう。

トリアッティというすぐれた人間、卓越し
た指導者を知るばかりでなく、イタリアの社
会主義運動を研究し、わが国の共産主義運動
を理解するためにも、本書の一読を学生諸君
におすすめる。(合同出版社・一九六五年
八月刊・B6・三二〇頁・八〇〇円)

—飯田 鼎—

* * *

新刊紹介

一〇七、(一〇七)